**№3　テーマ『愛の本質とは何か』**

**講話日2008年4月21日**

**皆さん、こんにちは。今日は本当だいぶ暖かくなってきまして、桜も終わりましたけども、四日市はハナミズキの花がだいぶ咲いているみたいで綺麗な季節になってきました。まだ経済状況とか政治状況は不安定で、不安定な要因が残っていて慎重に過ごさなければならない大事な時期だと思うんですけど、今日のお話は愛の話をしたいと思います。これから何回か愛の話で継続的なお話をしたいんですけど。愛は人間関係というものを司る力で、前回までは意志の問題でだいぶお話をしてきましたけども、感性論哲学では「人生は意志と愛のドラマ」という基本原理を掲げて人生の話をするんですけど。意志とは、やはり何事にも最後までやり遂げていく意志の強さというものがなかったら、人生はうまくいきません。また素晴らしい人間関係をたくさんつくるという力がないと、社内の人間関係においてもつまずくことになってしまいます。お客さんとかいろんな人間関係で悩まなければならない、ということになってきます。**

**社会に出れば人脈が大事だと言われるように能力があっても素晴らしい人間関係がなかったならば、能力は生かされません、その意味においても、社内において部下との関係、上司との関係、人間関係というものをどのように築いていったら良いのかは、非常に大きな皆さん方にとってもテーマになると思います。今日は愛の話、根本原理である愛の本質は何なのかということについてお話をさせてもらいたいと思います。**

**愛は人間関係の力、人間と人間を結ぶ力が愛なんですよ。愛は男女の愛だけではなくて親子の愛あるいは夫婦の愛、兄弟の愛、師弟愛、いろいろな人間と人間の関係性を根本においてを司る力が愛であります。ですから、人間関係から生じるすべての問題は、原理的にはすべて愛の力に関係していると言わなければならないわけです。人間関係から生じるすべての問題は、愛の力が未熟であるかあるいは愛のことを忘れて理性的・意志的な自己中心的な意識で、人と関わっているということから、愛の欠如というものが非常に大きな人間関係の問題になってくることもあります。会社というのは大体、仕事の繋がりでも役職の繋がりでも、理性的な意識でお互いに関わるということが多いものですから、ついつい仕事中に愛の意識を忘れてしまって、ついつい理性的な理屈で付き合ってしまう。そういうことになってしまうんですけど、だけど、ほとんどの人間は理屈も大事なんだけど、究極には心が欲しい、心遣いが欲しい欲求を持っています。しかし、ついつい理性的に説明をしたり、言い訳をしたり、ということから心の繋がりができにくい。ちょっとしたことでムカついてイライラして、そして人間関係に隙間風が吹くことになってしまいやすいです。これが愛の欠如ということに基づく人間関係の問題であります。愛の欠如ということによって、人間関係のトラブルが起こってくるかあるいは愛の能力の未熟さというものがあったりする。どういうことなのかと言ったら、愛は求める愛から与える愛へと成長していく。愛されたいという気持ちが強くて、愛する力が未熟であると、愛の未熟さになる。求める愛というものが大きすぎると、ついつい愛されても、愛されてもまだまだ足らないという形で、相手に不満を感じるということにもなってしまいやすいです。また、相手を愛するという風な積極的な気持ちがないと、相手にも満足を与えてあげることができない、ということから愛されたいという気持ちが強い、そういう未熟な愛における成長のレベルの人は、問題を起こしやすい。人間関係において躓きやすい。**

**もう１つは愛の表現方法の間違い。愛しているつもりなんだけど、全然相手は愛を感じていない。自己中心的な愛。部下のことを考えてやっているんだと上司は言いますが、部下は自分のことを考えてもらっていると思ってない。そういうすれちがいみたいなものがあります。でもこれは往々にして、親子の場合、お父さんお母さんは子どもを愛していろんなことを子どものために考えてやっているんだと言っているんですけど、子どもからすると、「全然お父さんお母さんなんか自分のことなんか分かってくれてない」という気持ちになってくるわけです。愛の表現方法の間違いということから生じる人間関係のトラブル・亀裂というものがあります。愛は相手に愛を感じさせてこそ愛。相手が愛を感じなかったら、自分はどんなに相手のために尽くしている、愛していると言っても、相手がそう愛を愛として感じてくれなかったら、それはまだ未熟な愛で本当の愛の力になっていない。自己中心的な愛しているつもりの愛という愛。愛の表現法の間違いで、自分が愛しているという風に思っている愛は、自己中心的な愛なんですよ。愛は相手が愛されていると感じてくれないと、本当の愛の意味、値打ちはない。自己中心的な愛は偽物の愛と言わなければならない。相手が愛を感じてこそ愛は存在するし、愛としての意味を持つんだ。相手は愛を感じてくれなかった場合は、自己中心的な愛、身勝手な愛、愛しているつもりの愛なんだ。これは恋愛にも言うことができます。夫婦の関係の中でもそういうことがあるし、親子の関係の中でも先ほど申し上げたように、お父さんお母さんは愛していると言うんだけど、子どもは全然愛されていると感じていない。親は愛しているつもりだけど、子どもには愛が伝わっていないというは状況なので、その愛は身勝手な愛、自己中心的な愛と言うことができるわけです。そういう３つの問題は、どんな人間関係の中にも必ずあって、それが人間関係もさまざまな問題を引き起こす原因になっております。愛の欠如、愛の未熟さ、そして愛の表現方法の間違い。**

**愛の表現方法というのは、さまざまなバリエーションがいっぱいありますので、愛の表現方法において上達しておこうと思ったら、いっぱい恋愛小説読む…いっぱい恋愛小説で学んでいこうとします。いろいろ本を読んで学んで研究をしないといけません。一応、人間関係から生じる問題というのは、すべて愛の力にその根本の原因があるということをよく知っておいてもらいたいと思います。だけど、我々は日常的に「愛している」「誰々が好きだ」ということを言って、仕事をし、生活しているんですけども。だけど、今の我々が愛と言っているものが、どういう風な内容なのかというと、相手が自分と同じように考えてくれないと相手は好きになれない。同じ考え方の人しか好きにならない。価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずがない。感じ方が一緒ではないと仲良くできない。価値観が一緒ではないと一緒に生活できない。そういう水準の愛を今の人類は持っております。私もそうですし、皆さんもそうです。自分と同じ考え方の人しか好きになれない。考え方が違ったら合わない、ということになってしまって、敵対的な気分になってしまう。だけど、相手が自分と同じように考えてくれないと、その人が好きになれないという愛は自分しか愛せない愛だ。相手が自分と同じように考えてくれる、同じ考え方の人しか好きになれない、これは自分しか愛せない人間の愛だ。自分しか愛せないような愛は、偽物の愛だ。**

**愛は本来、男が女を、女が男を愛するというものが、種族保存の欲求というところから出てきておりますので、愛は他者を愛するという風な、自分とは違う存在を愛するという関係性から出てきております。だから、自分しか愛せないような愛は偽物。自分しか愛せないでどうして子孫を残せようか。種族保存の要求、子孫を残すという命の在り方から愛が出てきておりますので、その意味でまずは同じ価値観の人としか一緒に仕事ができないという愛は、偽物の愛だ。相手が自分と同じように考えてくれないと好きになれない、これは自己中心的な愛だ。本当に相手を好きなんではない、自分しか好きになれない、自分しか愛せない人間だ。この愛の現実を我々は直視、真剣に見つめてみる必要があります。**

**なぜ宗教・民族が違うとは戦争して殺し合うのか。なぜイデオロギーというか考え方が違うことによって敵対的な関係になって、米ソ関係とかで中国とアメリカの関係など、政治体制の違いとか考え方の違いで常に対立するわけですけど。なぜそうなるのか。その原因は何なのかと言ったら、近代何百年かは人間の本質は理性だと考えられて、理性的になればなるほど人間は立派な人間になるんだ、ということで理性を成長させるための知育変調であったためです。偏った理性教育がなされてきた。その結果として、我々は理性的に考えて正しいことをしなければならないという風に考えてきたわけです。結果として、理性的に考えて正しいことをしなければならないというに考えた結果、全人類が理性の奴隷となった。人間ではなくなってしまって、人間性を破壊されてしまって、 心の喪失という状態に陥ってしまって、理性で正しいと思うことをしようと思った結果、人類は理性の奴隷となって人間性が無くなってしまった。人間性を破壊されてしまった。血の通った温かな心遣いが不得手と言うか、だんだんできなくなってしまった。結果として愛すら理性化されてしまって、同じ考え方の人しか愛せない、同じ価値観の人しか愛せない、同じ感じ方の人しか愛せない、同じ宗教の人しか愛せない。**

**日本人は宗教が違っても愛せますけど、海外に行ったら宗教は違うことは、もう結婚できないということになってしまうほどの大きな問題になっているところが非常に多いです。ちょっとした違いを理由にした対立をし合う、これは理性によって支配された人間の悲しさです。なぜ理性的な人間になると、同じ考え方の人しか愛せないのか。なぜ理性的な人間になってしまうと、価値観が違ったら一緒に仕事ができないのか。たぶん、皆さんも常識的に言って価値観が違ったら一緒に仕事ができないな、と思ってらっしゃるはずなんですよ。また考え方が違ったら、とても一緒に仕事はやっていけないなと思ってらっしゃるはずなんですよ。価値観を統一しようとか考え方を一緒にしていかないと、なかなか仕事がはかどらないなと思ってらっしゃるはずです。それでは、これからの個性の時代を生きる力はありません。個性の時代というのは、皆考え方も違っていてもいい。皆感じ方も違っていてもいい。皆価値観が違っていてもいい。お互いに違うものを持っていながら、どういう風に仲良くやっていくことができるか。そこに個性の時代というものを生きる力というものが出てくるわけですよ。考え方や価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずがない、というのは理性的な人間であって人間性がない。あるいは血の通った温かな心がなくなってしまった人間のいうことであります。血の通った温かな心があるということは、考え方が違う人とどうしたら一緒にやっていけるだろうか。価値観の違う人とどうしたら一緒に仲良く仕事ができるだろうか、ということを考えることが、その証明なんですよ。**

**考え方が違ったら一緒に仕事ができない人というのは、心遣いはしておりません。そこには血の通った温かな心は微塵もない。本当に我々が素晴らしい人生というものを生きていこうと思ったら、違った考え方の人とも違った価値観の人とも一緒に仕事ができる、一緒に生きていくことができる、仲良くできるような自分をつくる努力をこれからしていかなければならない。これがないと、会社の中にはいろんな考え方の人もいるし、いろんな価値観の人もいる。それが会社という組織で、会社は社会の縮図ですからね。いろんな性格の人がいる、その中で皆と仲良く、上司とも仲良く、部下とも仲良く、同僚とも仲良くやっていこうと思ったら、どうしても個性の時代を生きるという力が要求されてくるわけであります。だけど、残念ながらまだ現在の人類は、個性の時代を生きる人間性、個性の時代を生きるために必要な愛の力というものをまだ持っていないのが現実なんですよ。そういうところから離婚の激増というのが止まらないと言うことになってきます。ちょっとした違いが、「もう一緒にやっていけない」ということで離婚になってしまう。親の言うことを子どもが聞かないと、親がムカついてしまって、虐待になってしまう。日常茶飯時に見られることになってしまっている。事件にならないだけで、許せないんですよ。なんとか自分の言うことを聞かそうと思って…、「それは躾だ」と言いますが、それは親のわがままなんですよ。これは皆さん方も、これから結婚する方、もう既に結婚されている方もいらっしゃると思いますが、子どもを産んで子どもを育てているということになった場合、よくよく気をつけていないと、うっかり子どもの心に深い傷を与えてしまうような、虐待的な言動をしてしまいかねない。それが残念ながら現代人の愛の実状であります。**

**一般的には従順な子どもは良い、と考えている人が多いんですけど、だけど人間が生まれてくるのは何のためか、人間が生まれてくるのは歴史をつくるためなんです。全人類に共通する出生の理由、人間が生まれてくるのは何のためかといえば、歴史をつくるためであって、新しい時代をつくるために人間が生まれてくるんですよ。新しく生まれてくる人がいなくなってしまったら歴史は終わりますからね。だから、基本的に人間の出生の理由は歴史をつくるためなんですよ。歴史をつくろうと思ったら、どんなことをセントバーナード、どんなことをしないといかんかと申しますと、今までの人間が誰もやったことがないことをしていかないと歴史はつくれないんですよ。だから子ども達は生まれてくると、他の誰もやったことがないことをするように宿命付けられていますから、だからどうなるかと言えば、反抗するわけです。第一反抗期、第二反抗期という反抗するという生き方が、子どもの命の中にちゃんと生まれながらにプログラミングされているわけですよ。反抗することによって、自分の欲求とか自分の考え方、自分の価値観というのは、だんだんだんだんつくっていくということをするのが、子どもの成長のプロセスであります。いつまでもお父さんの言うこと聞いていたり、いつまでも先生の言うこと聞いていたり、いつまでも大人の言うことを聞いていると自分ができないんですよ。自分というものがどういう人間なのか、自分の考えとか自分の価値観とか自分の欲求というものを持てない。結局、何をしていいか分からないという状態に陥ってしまう。**

**これが従順で素直な子がいいという家庭教育、社会的な常識に縛られた形で蔓延してしまっている。自分の意見を言うことが悪いことのように考えられて、自分を抑えてしまって、そしてついには自分が何なのか、自分の考えが何なのか分からない、自分の価値観がどんなことか全然分からない、何がしたいのか分からないと状態になってしまって、自分を見失うことになってしまう。とにかく、人間は自分をつくるために、反抗しなければならないというように宿命づけられているもの。反抗というのは、自分自身というものになっていくためにどうしても必要なプロセスなんですよ。本当の人間教育というのは、反抗をさせないとその子らしいその子に成長していくことはできない。だから、教育は反抗を恐れてはならない。反抗させながら、してきたら、「君はそのように考えるんだ」として、その人の考え方を認めてあげて、より素晴らしいものに成長させてあげる。そういう対応の仕方をしないといけません。反抗するということは、自分自身になっていくための必要なプロセスです。だから、子どもはいろんなことで反抗をするんです。**

**だけど、お父さんお母さんが反抗を嫌うと、子どもというのは「反抗したら嫌われるんだ」と思ってしまって、そしてお父さんお母さんが好きだから、お父さんお母さんに憎まれたくないから、だから反抗しないで自分を抑えて、従順で素直な子を装うという生き方になってしまいます。親からしたら子を殺しているんだ。本当にその子が自分らしくなることを親が妨げていることになってしまって、そこには本当の愛はありません。子どもが反抗しないで従順であったならば、それを親が喜んでいたらいけない。子どもが素直で従順というのは、異常なこと。本当は反抗して、自分というものをつくっていくというプロセスを歩んでいかなければならない。嫌われたくないから、だから従順で素直になろうと努力するんですよ。だから本当に従順で素直な子がいたら喜んでいるんではなくて、お父さんお母さんのためにいつも我慢して耐えてくれて頑張ってくれてありがとうと、感謝してあげないと子どもの心は報われない。そういう対応をしてあげると、子どもは親の愛を感じるんですけど、従順で素直ないい子だと言っていると、ますます従順で素直にならないといけないと思ってしまって、ますます自分を押さえて苦しむんですよ。そうであると、ますます「全然お父さんお母さんなんか、自分のこと分かってくれていない」と思い、親の愛を感じなくなってしまう。お父さんお母さんは子どもを大事にしているんだけど、子どもは全然親の愛を感じない。だんだんだんだん子どもの心が分からなくなってくる。どんどんお父さんお母さんと子どもの距離は離れていってしまう。子どもが我慢して頑張ってくれているのかを分かってあげないと、子どもに愛を感じさせる親にはならないんですよ。**

**だけど、ほとんど現在の常識から言うと、従順で素直の子がいいと思っているものですから、お父さんお母さんも子どもが反抗する、子どもが言うこと聞かないとムカついてくる、許せない。ついつい言うことを聞かす、しつけのつもりで言うことを聞かそうとするんだけど、ついついいき過ぎてしまって、虐待ということになってしまう。本当に事件にならなくても、ほとんどの家庭でそれに近いことは行われている。だからといって、子どもを甘やかして、言うとおりしてあげるみたいなことでは、これは子どもを堕落させていってしまう。わがままな子どもをつくってしまいます。だから躾もちゃんとしないといけない。だけども、子どもの気持ちもちゃんと分かってあげるという対応をしてあげることが愛なんですよ。ついでに申し上げると、躾とは何なのかと言ったら、基本的に社会を人間として生きていくために基本的に要求される、必要とされる人間の生き方というものです。**

**躾というものは４つの重要な課題、言動があって、まずは挨拶をする。そして返事をする。第１番目は、挨拶ができる。それから元気よく返事ができる。それから感謝ができる。「ありがとう」と言える。第４番目、謝罪、謝ることができる。「ごめんなさい」と。この４つが躾の基本なんですよ。朝会ったら、「おはようございます」と言える。帰ってきたら、「ただいま」と言える。誰かが出ていくときに、「いってらっしゃい」と言える。あいさつ。これをできることが第１番目に大事なこと。第２番目は、名前を呼ばれたら返事ができる。何か質問されたら、それに答えることができる。応えようとする、応答関係。何か言われても全然返事しないで黙っているというのは、なしのつぶてで、全然応答関係、受け止める力がないということになりますので、何か言われたら「分かりません」「できません」など、一応言葉でちゃんと反応する。応答関係というものがなかったら、会社の業務も成り立ちません。**

**第３番目は、感謝ができる。「ありがとうございます」とか「嬉しい」。相手のしてくれたことに対してちゃんとお礼が言える。これも大事なことであります。第４番目は、謝ることができる。人間は不完全ですから、常に欠点がある。「ごめんなさい」「許してください」ということができる。この４つがちゃんとできるということが躾なんですよ。これは社会生活の上でどうしてもなければならない基本的な言動なんです。躾は強制的に子どもにさせるということが必要なんですけども、だけど、子どもが自分の意志というか自分を表現するようなことで、何かしら反発・反抗ということをしてきたならば、「この子はこういう風に考える子なんだ」「この子はこういう気持ちを持っている子なんだ」と言って、反発することを通して心を理解してあげる。そういう応声をしていかないといけません。そうしていかないと、子どもに愛を感じさせるまたは社員に上司の愛を感じさせることができない。**

**反発してきたら「君はそのように考えるか」とその人のことを理解してあげる。そうすると、「上司は自分のことを分かってくれている。自分のことを認めてくれている」と愛を感じてくれるわけです。とにかく、今の我々の愛と言っているものは、全てとは言わないまでもほとんど偽物の愛だ。自分と同じ考え方の人しか愛せない、自分と同じ価値観の人しか一緒に仕事ができない、これは理性によって支配された愛であり、愛の本当の本質を持っていないと言わなければなりません。**

**なぜこういうことなってしまったのかと言ったら、理性教育をされたから。自分が理性的な人間になってしまった結果です。理性は、真理は１つと考えるから、違った考えの人が出てくると対立するわけです。どちらが正しいか決着をつけるようになってきて、そして自分と違った考えの奴は許せないということで、自分の考えを押し通す。その結果として喧嘩になる戦争になったりする。理性は矛盾を排除する。矛盾があったら間違いだというのが理性です。自分と違うものをのけ者にしていく。これがいじめの構造というものです。違うものを毛嫌いする。違うものを排除する。いじめというのは学校だけではない、会社にもある。家庭内いじめもある。自分の言うことを聞かない奴をのけ者にしていく。家庭でも大家族になっていくと、よくあります。会社にもイジメがある。仲間はずれにしてしまう。違うものを排除していく。矛盾を排除するというのは、理性が原理となって出てくる言動であります。**

**理性は画一性を追求する。皆と同じ、共通するものをつくり出そうとする。理性的になればなるほど個性はなくなるわけです。皆に共通するものをつくり出そうとする、それが理性なんです。理性的な人間は、真理は１つと考えるから自分と同じ考え方の人しか許せない、認められない。矛盾を排除するから自分と違うものは除け者にする、いじめる。個性を奪ってしまって、他人を支配しようとする。自分と同じものしか受け入れない。これが理性に支配された人間の言動であります。今の人は、「自分はそんな理性的な人間でないけどな」と思っていらっしゃる方でも、ほとんど理性の奴隷なんですよ。そういうことを考えたら、我々が血の通った温かな心を回復し、また人間性を取り戻そうと思ったならば、我々は理性の支配から自分自身を解放しなければならない。自分自身が理性の奴隷になっている状態から解き放たないと、本当の愛を取り戻すことはできないし、また本当に血の通った温かな心を持った人間になれないということを我々は考えなければなりません。**

**だけども、今の我々の愛の現実というのは、ただ理性に支配されているというだけではなくて、まだまだ愛に苦しむという段階にある。愛の重要性とか愛の素晴らしさというのは、古くから人類は知っているんですけども、だけども愛はずっと今日に至るまで自然発生的な意識として放置されてしまっていて、愛を能力としてまた愛を実力として成長させようという風な努力をまだ人類はやったことがない。愛は人間が人生を生きる力としての文化になったことがない。まだ文化として成長させられていない。ここに我々が愛が大事で素晴らしいと言いながらも、ほとんどの人が愛に苦しみ、悩むという状況にあるというところに原因があります。**

**人間が現実を生きる力になったとき、文化といいます。なぜそういう状態に放置されていたのかと言うと、愛というものは理屈を超えたもの、愛は理屈抜きのものだと考えられてきた結果、今日に至るまで学問の対象となって研究されたことがないんです。愛は学問の対象から除外されていて、もっぱら文学のテーマだった。文学の中では、愛は本当にさまざまなバリエーションが描き尽くされていて、これ以上何も語られないのではないかと思うぐらいさまざまな形で表現され、考えられております。だけども、愛のさまざまな現象・形態、バリエーションは、どれだけ描かれても愛の力は成長しません。愛というものを我々が現実を生き抜く力、人生を生きる力に変えていこうと思ったら、どうしても愛のさまざまなバリエーションという現象・形態だけではなくて、愛の本質に目覚めていかないと、愛を生きる力に変えていくことができないんです。**

**なぜ愛を、現実を生きる力に変えていかなければならないのか。なぜ愛を自然発生的な状況で放置してはならないのか。それは、愛は理屈を超える力と昔から言われてきて、理性によってつくり出されてくる問題は、愛の力によってしか乗り越えられない。これが愛は理屈を超える力と言われている意味であります。だけど、残念ながら理屈を超える力である愛が、まだ理屈を超える力になっていない。反対に理性によって支配されてしまって、愛の本質が見失われてしまっている。それは愛が自然発生的な状況のままで放置されていて、愛を生きる力に変えていこうとする努力がまだ現実的に１回もなされていないからだ。なぜ愛は理屈を超える力と言われるのか。またどうして愛を能力として成長させるということを考えなければならないのか。ほとんどの人が、まだ愛を能力と考えていない、愛を実力と考えていないんだ。ほとんどの人が愛は、感情・本能・情熱・自然発生的なものだと考えてしまっている。であるが故に愛は現実を生きる力にならない。**

**どうしたら愛を能力と考えることができるのかということなんですけども、愛というのは命を生む力なんですよ。命は愛によってしか生み出すことができない。そして愛は命を育む能力である。育児本能という風に言われたりしますけども、お母さんが自分の子どもを育てている…愛がなかったら子どもは育ちません。愛は命を育む能力である。そして愛は最終的に命を満たす能力。命は愛されることを望んでいる。愛によってしか命は満たされない、満足しない。愛は命を生む能力である。そして育む能力、満たす能力。だからほとんどの人は、心が欲しい、愛が欲しいと叫ぶわけです。誰からも愛されなくなってしまったら、生きることができない。死にたくなる。それほど愛は命を生かす力なんですよ。愛されれば、たちまちにして生きる力が湧いてくる。生きる希望が湧いてくる。愛は、命の生きる力、根源にかかわる重要な能力です。**

**愛は理性と同じように能力なんだ、ということを我々は知らなければなりません。またなぜ、愛は理屈を超える力、理屈を超える能力と言うことができるのか。それは理性という能力は、人間の持っている脳という肉体に限定された能力。愛は命を産む能力であり、育み、満たす能力。命全体に関わる根源的な力。であるが故に、脳に限定された能力よりも、はるかに大きいと言うことができるわけであります。そういうところから、愛は理屈を超える力と言われて、理屈によってつくり出されてくる問題は、愛の力によって解決できないと昔から考えられています。だけども、残念ながら愛というものがまだ学問の対象となっていない。愛という能力を成長させるという風に考えて、努力したことがない。まだまだ愛は自然発生的な状況のままで放置されてしまっている。だけど、これから離婚の激増を食い止めるためにも、また幼児虐待を防ぐためにも、高齢者の虐待を防ぐためにも、また戦争をなくしていく力を人類が持つためにも、我々は理性によってつくり出された問題を乗り越えるためにも、愛を能力として成長させていく努力をしなければなりません。これが、自分が幸せになるための努力であり、また周りの人を幸せにするための努力であり、またひいては戦争のない世界をつくっていく力を、人類が獲得していくための努力になってくるわけです。**

**これから我々は、愛を能力として成長させていくことを考えなければならない時代に入ってきました。愛の力が劣っている人は不幸になる。人間関係において良い人間関係をつくれない。だから不幸になってくる。自分の周りに自分とって嫌な人が増えてくれば不幸。自分の周りに自分の好きな人が増えてくれば幸せ。多くの人が好きになれる。それが自分が幸せになるための原理です。素晴らしい人間関係をたくさんつくる力、愛の力を成長させることしか自分が人生において幸せというものを獲得する道はありません。是非皆さん方も、愛は情緒・感情・本能・情熱という風な自然発生的なものであってはならない。愛は能力なんだ。愛は力なんだ。理性と同じように問題を解決することができる能力として、愛を考える。そういうことをぜひ分かってもらいたいんですよ。**

**残念ながら、まだ世界中を見渡しても愛は能力だと言っている人がいないんですよ。まだ、ほとんどの人は愛は文学のテーマであって、愛は情緒・感情・本能・情熱という次元の問題と思い、固定観念に縛られてしまっていて、愛というものを能力として成長させようという意識を持っている人がほとんどいない。だから、人類はまだ愛に悩み、苦しんでいるんです。だけど、そういう状態で置いといたのでは離婚の激増は止まりませんよ。幼児への虐待も防げません。戦争をなくして平和な世界をつくっていく力を成長させることもできません。皆さんも幸せな人生を自分自身が歩むために愛を能力として成長させなければならないことを分かってもらいたいんですよ。今自分が持っている人間関係を今よりもっと素晴らしいものにしていく。そして、今うまくいってない人間関係もちゃんとそれを修復して、素晴らしい人間関係に変えていくことができる力を是非つくってもらいたい。それが組織の中で自分が幸せな人生を送れる、幸せな気持ちで仕事ができる自分になれる唯一の道ですから。人間関係も力である。愛を能力として成長させることなしには幸せには絶対なりませんよ。努力をしていなかったら、自分自身が不幸を呼び寄せる人間になってしまうし、また周りに不幸をばら撒くような、人を不幸にする人間になってしまいます。**

**では、どうすれば我々は愛というものを、いろんな問題を解決していくことができるような実力として、磨いていくことができるのか。どうすれば愛を能力として成長させていくことができるのか、それをこれから考えていかなければなりません。そのためには、まず愛を学問的に考えないと、能力として成長していくということになっていかないんですよ。愛を学問の対象とするとは、どういうことなのかと言ったら、我々が人生を生き抜いていく力にしていく。人生を生きる力のことを文化といいます。文化とは、自然に存在するものに対して人間が手を加えて、より素晴らしいものにしていく努力を通して人間性が成長したとき、それを文化というんですよ。ちょっとややこしい規定ですけど、文化とは何なのか。カルチャーとは何なのか。自然に存在するものに対して人間の手を加えて、自然を自然のまま放って置くのではなく、より素晴らしいものにして、努力を通して人間性が成長したときに文化となる。**

**文化は、どのように始まったのか。人類と文化はどういう風にしてできてきたのか。文化の出発点は、昔から農業だと言われています。自然に存在する草花に人間の手を加えて、たくさん収穫できるような稲をつくっていく。あるいは病虫害に強いものをつくる。あるいは風・水害に強い稲をつくる。あるいは美味しいものをつくる。そういう努力を積み重ねていくことによって、農業は発展してきました。だけど、それだけでは農業技術なんですよ。農業というものが文化の根源と言われるのはなぜかと言ったら、自然に存在する稲をより良くしようと努力をすることによって、人間性が成長したとき、それを文化と言うんですよ。**

**茶を飲むというのは、なぜ文化なのか。それは、ただ茶を美しく飲むという作法だけではなくて、茶を美味しく飲むという努力によって、人間性が鍛えられ、人間の本物になっていくという結果が出ることによって、それを茶道、文化というんですよ。柔道でもただ格闘技で勝つだけなら、それは技術であって柔術だ。柔道というのは、柔の道を鍛えていくことによって人間性が鍛えられて、人間が立派になっていく。そのときに柔術を柔道となるわけですよ。**

**農業なんかでも、ただ農作業をするという労働だけではなくて、農作業をすることによって人間性が鍛えられていく。人間が成長する。そういうことであるから農業文化としての意味を持っているのであります。農業を英語で言うと、アグリカルチャーという名前がついているんですよ。農業という職業にだけ、カルチャーという言葉が付いているんです。それを持って、カルチャー・文化の根源だと言われている証があると言えます。**

**なぜ農業というものが、ただ美味しい米をつくるというだけではなくて、人間が成長するのか。それは、農業というものが、種を蒔いて芽が出て苗ができて、それを育てる過程でさまざまなことをして雑草を抜いたりしなければならない。そういうことをしても、秋になったら台風が来て、せっかく育てたものが全滅して台無しになってしまうこともあるかもしれない。命を育てているということは、どれだけ一生懸命頑張っても、結果としてそれが報われない。そういうことがあるかもしれない。不安を抱えながら、稲を育てなければならない。台風が来てやられてしまうんだったらやめておこう、ということでは稲は収穫できない。そういうところから人間の心は鍛えられて、そういうことを短歌・和歌にしたものがあって、有名な二宮金次郎、二宮尊徳さんの短歌なんですけど、「この秋は雨か嵐か知らねども 今日のつとめの 田草取るなり」と言って、先はどうなるか分からないけども、とにかく今日することをちゃんとやっておかないと、収穫の秋を迎えることもできない、と。これは農業だけではなくて、全ての職業に共通することであって、今しなければならないことをちゃんとやってこないと、結果は出ないんだ。だから結果がどうのこうのと考える以前に今日すべきことを今日やっていく。それしか人間の基本的な生き方はないんだ。今日一日に全力を尽くす。その積み重ねが結果としての人生をつくり出すんだ。そういう生き方を農業は人間に教えてくれたわけであります。**

**だから、あらゆる悟りの究極は、農に返ると言って、剣道という刀を振り回して人を斬るという剣の道も、最終的には剣を捨てて農に返る。剣道の極意は無刀にありと言われ、刀を持って振り回している間はまだ剣は浅い。刀を置いて、そして刀を持っていなくても、刀を持っている人間が恐れ、斬りつけようとしても隙がない、刀を持っている人間が汗水たらして「参りました」となる。そういうところまでいかないと、剣は極められないと。剣を捨てて鍬を持って土地を耕す、というところに剣道の極意もあり、また坐禅・瞑想の究極の姿もあると言われております。**

**とにかく、文化というのは、自然に存在するのに対して人間の手を加えて、自然のまま放って置くよりもっと素晴らしいものにしていく努力を通して、人間性が成長するときに文化・カルチャーとなります。愛も自然に出てくるものなんですけども、愛する・愛されたいという心情も自然に出てくるものなんですよ。それを自然のまま放って置くのではなく磨いていって、そしてそれを人間が人生を生きる力に変えていく。そのことによって人間性が成長して、心ができて、血の通った温かな心が成長していく。そのとき、愛は文化になったと言えるわけです。文化として成長させていって、理性でつくり出されていく。そうして、離婚の激増という問題を愛の力、能力によって解決して乗り越えていこうと思ったならば、我々は愛を文化とするために、まず愛を学問の対象として研究しなければならない。農業もやはり、学問として農学部の農業の研究があって、はじめて文化になっていくわけですので、学問の対象として研究しないと、愛も現実を生きる力に変えられませんし、文化にはならない。**

**学問の研究の対象にするということは、どういうことなのかと言うと、学問というのは、あらゆる物事を時間・空間という枠組みに乗せて考えていく。そういうことをすると、学問的という答えが出てくるわけであります。これは簡単に言ってしまうと、愛について考える場合でも、レジメに書いてあるように「愛における空間論的本質とは何だろうか」「愛における時間論的本質とは何だろうか」を考えていくことによって、愛というものがだんだんと本質がはっきり見えてくるというレールに乗ることができるわけなんです。こういう風に考えていかないと、愛というものを我々が現実を生きる力に変えていくということになりません。**

**そこでまず愛を学問的に考えて、愛における空間論的本質とは何なのか。空間論的に出てくる愛とは何なのか。どういう風にすることなのかと言ったら、愛は人間と人間を結びつける力だ。つまり、人間関係の力だ。人間関係の全体は社会だ。社会とは現実的空間である。だから社会とは何なのかを考えていくことによって、愛における空間論的本質が見えてくる。これが哲学という学問において、 愛を学問的に考えていくという流れなんです。愛を空間論的に考えていくとは、愛は人間関係の力である。愛は人間と人間を結びつける力だ。つまり、人間関係の力だ。人間関係の全体は社会だ。社会とは現実的空間である。だから社会とは何なのかということを考えていくことによって、愛における空間論的本質が見えてくるであろう。こういう論理の流れを哲学的に考えるというんですよ。**

**考えるというのでも、セオリーという数学の計算のようなやり方と、ロジックという言葉を使って論理で考えるという考え方があるんですよ。セオリーは数学定理計算で、理屈が合うようなは考え方をしていくということなんですけども、もう１つの考え方にロジックと言って、言葉というものを駆使して、理論的に考えるんだという論理的に考えるんだ。理論と論理は違う。理論のことをセオリーと言うんですよ。論理のことをロジックといいます。哲学はロジックを使って物事を考えていくんですよ。**

**ロジックとはどういうことなのかと言ったら、今申し上げたように愛は人間と人間を結びつける力である。数学的計算で出てくるような考え方とは、全く別次元の考え方であります。愛は人間と人間を結びつける力である。だから、愛は人間関係の力である。人間関係の全体は社会だ。社会と現実的空間である。だから、社会とは何なのかを考えていくことによって、愛における空間論的本質が見えてくるであろう。では、社会とは何なのか。社会に中には、さまざまな性格の人がいる。社会の中には、さまざまな考え方や感じ方の人がいる。社会には、さまざまな宗教の人がいる。それが社会の現実だ。社会の中で生きるということは、自分とは違った性格の人と共に仲良く生きるということであり、社会の中で生きるということは自分とは違う考え方や感じ方や宗教の人とともに生きることが、社会の中で生きるということなんだ。**

**社会の中で要求される社会性とは何なのか。社会性とは、自分とは違う性格の人と共に仲良く生きる力があることを社会性があるというんだ。自分と違う性格の人と共に仲良く生きることできない人は、社会性がないというんだ。社会とは何なのか。社会の中にはいろんな性格の人、いろいろな考え方の人、いろいろな感じ方、立場や価値観、宗教の人がいる。それが社会だ。その社会の中で要求されるものは、社会性というものがある。社会性とは何なのかと言ったら、自分とは違う性格や自分とは違う考え方の人と共に仲良くできる力を社会性というんだ。自分と違う性格や自分と違う考え方の人と仲良く生きられないというのは、社会性がないと言われるんだ。そして人間が社会的存在であるとするならば、社会性がないことは人間性がないんだ。人間性がないということは、人間ではないんだ。**

**そう考えていったら、自分と違った性格の人と、また自分と違った宗教の人と仲良く生きていけないとは、社会性がない。社会性がないことは人間性がないんだ。人間性がないと言うことは人間ではないんだ。このことが分かっただけで、もう恥ずかしくて宗教戦争なんかできませんよ。宗教が違うからと言って、殺し合っているということは人間性がないんだ。人間ではなかったんだということになりますから。だから国連で全世界の代表者の方に集まってもらって、「社会とは何なんでしょう」と考えただけで、もう恥ずかしくて戦争なんかできませんよ。民族が違うから宗教が違うから、考え方が違うからと言って戦争していたら、自分は人間性がないんだということを証明しているようなものなんだ。人間ではないことを証明しているようなものなんだ。このことが分かっただけでも、恥ずかしくて戦争なんかできない。それほど重要な原理ですよ。**

**こういう風に論理的に、ロジックでちゃんと説明すれば、小学生で分かるような考え方ですよ。性格が違うからといって一緒にやっていけないというのは社会性がないんだ。社会性というのは、性格が違う人と仲良く生きていく力。理性の奴隷、人間性が破壊されているんだ。血の通った温かな心がないんだ、ということになるわけですよ。このことをちゃんとちゃんとちゃんとの味の素で、ちゃんとちゃんと分かってもらおうと思ったら、「なぜ人間は社会的存在なのか」ということを証明しなければならない。人間が社会的存在であると証明する根拠というものが２つあるんですよ。**

**なぜ人間は社会的存在と言わなければならないのか。それは、人間の子どもに生まれてきても、狼に育てられてしまうと狼少年ケンになってしまう。小さい頃に狼に攫われてしまって、狼の社会の中で生活して、狼のお母さんのおっぱいなんか飲んで成長してしまったら、狼の習性を脳が覚えてしまう。三つ子の魂百までということになって、もう人間に戻れないんですよ。これが人間の脳の構造であります。実際に1920年にインドで狼少女という２人の女の子が発見された。約３ヶ月の子が狼に攫われて、６歳ぐらいで発見されたと言われているんですけど、６歳まで狼の社会の中で生活していると、もう人間の脳が狼の習性を覚えてしまう。だから完全に狼的な活動しかできない。そういうことで、なんとか人間に戻そうとする努力をしたんですけども、片方はすぐに死んでしまって、もう片方は10年ぐらい生きたそうですけど、死ぬまで狼の習性を持ち続けて、人間の心とか理性は出てこないまま死んでしまったそうです。人間の子どもに生まれてきても、人間は人間の社会の中で人間の手によって育てられないと、人間にはならない。だから人間は社会的存在だと言われるんですよ。猫にさらわれてしまったら、猫少年ニャンになっちゃいますからね。なぜ、そうなるのか。犬や猫は人間に育てられても人間にはならない。犬は人間に育てられて大きくなってもランドセルは背負いません。犬は人間に育てられても犬にしかならないんですけど、人間はうっかり犬に育てられてしまったら、脳が犬の習性を覚えてしまって、犬少年ワンになってしまうかもしれません。それはなぜか。人間以外の動植物は、遺伝子と本能の支配のもとでしか生きられない。完全に人間以外の動植物は遺伝子と本能に支配されているんです。だから、どれだけ人間に育てられても遺伝子に決められたようにしかならない。人間の命は遺伝子と本能の支配を超え、自由の領域を獲得した命なんですよ。ある程度、50%は本能とか遺伝子に支配されていますけど、一方的に本能に支配されていない。人間は本能をコントロールするという力を命が持っている、自由を獲得した命なんですよ。だから、生まれてから後に、何を教えられ、いかに育てられるかによって、いかようにも変化する。つまり、上手に育てられたらすごい人にもなるんだけど、下手な育てられ方をすると人の顔をした獣にもなる、というのが人間の恐ろしさであり、素晴らしさであります。これが人間以外との動植物の命の次元の違いから生じる問題なんです。**

**特に人間においては、生まれてから後の教育が大事だと言われるわけですよ。何を教え、いかに育てるかによって人間が決まるという風に言われているわけです。人間の子どもに生まれてきても、誰に育てられるか、どう育てられるかによって、人間は変化する。人間の手によって人間の社会の中で育てられないと、人間の子どもは人間にはならない。だから、人間は社会的存在だと言われるんです。**

**もう１つの根拠は、自分が今ここに生きているということは、過去に２人の人間がいなきゃならないと証明しているんですよ。２人の人間とは、お父さんとお母さん。この２人がいないと、自分は生まれてこなかった。だから人間というのは、自分が存在することによって、お父さんとお母さんという２人の人間と自分、３人の人間が存在することを自分の命は証明しているんだという風に考えることができるわけです。だから、人間は誰でも皆、３人の人間を背負っているんだ。社会の最小単位は３人であって２人ではない。２人は個人的関係であって、社会は３人が最小単位なんだ。**

**なぜかと言ったら、社会というのは１人称２人称３人称という認証の構造によってできているのであって、生きた社会の現実というのは、３つの目を統合しないと生きた社会の現実は分からない、というのが学問的に社会を捉える場合の基本的な考え方であります。自分の目から見たら、社会はどう見えるか。相手の目から見たらどう見えるか、第三者の目からはどう見えているか。この３つの目を統合しないと、生きた社会の現実は分からないという社会現実を理解するための基本的なやり方なんですよ。だから、皆さんが仕事をされる場合でも、自分の判断と相手の判断と第三者の判断、３つの判断を統合して、そして最終的な結論を出すということをしないと、本当に現実に即応した答えを出すことができません。自分の判断だけでは歪んでいる。相手の判断だけでも歪んでいる。第三者の判断だけでも歪んでいる。この３つの判断を統合しないと、現実的な正しい判断、回答、答えは出ないんだ。これも自分の偏見を脱却し、本当に生きた現実に適用することができる考え方をしていくために大事な原理であります。**

**夫婦は２人だけでかかわっているから、小さい問題で喧嘩をしているんです。第三者が見たら、「なんでそんなことで喧嘩をするの」と言いたくなってしまうものです。第三者の意識というのが入ることによって、夫婦喧嘩を乗り越えていけるという力、回答が出てくるわけなんですよ。３つの目を総合しないと本当の答えは出ない。これも仕事をしていく上で大事なことであります。自分というものがどんな人間なのかを考える場合でも、自分の判断とそれから部下の判断と同僚の判断と上司の判断、全部を統合をしないと、本当の自分は見えないんですよ。**

**だから本当に現実に、さまざまな条件の下で仕事をして、いろんな問題に答えを出していこうとする場合、忘れてはならない重要な考え方です。とにかく、自分が生きているということは、３人の人間の存在を背負っている。だから、３人は社会だ。だから、人間は社会を背負って生きているんだ。つまり、人間は社会的存在だ。これも根拠になるわけです。この２つのことが根拠となって、人間は社会という存在だと言われるわけであります。つまり、人間は社会的存在だから、社会性がないということは人間性がないんだ。人間ではない。そう考えたら、性格が違うから一緒にやっていけないという人は、人間性がないんだ。つまり、人間ではないんだ。空間論的に愛とは何なのかを考えたならば、性格の違う人と仲良く生きる力のことを愛というんだ。考え方の違う人と仲良く生きる力を愛という。価値観の違う人を排除しないで、一緒に生きることを愛という。それが本来の愛なんだ。ということが分かってくるわけです。つまり、空間論的に愛の本質とは、他者と共に生きる力だ。他者というのは、考え方が違う、性格が違う、宗教が違う、それを他者と言います。愛とは、他者と共に生きる力である。**

**では、どうしたら考え方や価値観や感じ方が違う人と一緒に生きることができるのか。同じ考え方の人とばかり付き合っていたら楽しい、愉快で楽だけど、成長しないんですよ。会社でも人間でも成長しないといけないですよ。成長しようと思ったら、同じ考え方の人とばかり付き合っていたらいけない。成長するためには、どうしても自分にないものを持っている人と関わらないと成長しないんですよ。成長しようと思ったら、会社でも発展しようと思ったら、時代の変化に対応して会社を発展させていこうと思ったら、変化に応えていかなければならない。違うものを受け入れていかなければ、発展・成長はしない。だから、成長しようと思ったら自分と違う考え方、自分と違う性格、自分と違う立場、自分と違う宗教の人と関わって、そして自分にないものを何かしら相手から学んで、そして自分の考え方を成長させて、そして「君と出会えてよかった。君と出会えて君からこれを学ぶことができた。こんなことに気づいてこんなに成長できました。ありがとう」と言って、感謝をする。これが個性の時代、違う考え方の人と共に生きることができる力をつくる方法。違う考え方の人いるから、自分は成長できる。違う宗教の人がいるから、自分の宗教について考えて成長していくことができる。違うものと触れ合うことによってしか、人間は成長しない。**

**だけど、まだまだ宗教でも個人主義という近代の個人主義・民主主義という時代の考え方を引きずっていて、皆、自分の宗教が最高だという自己主張の強い形を持っております。だから喧嘩になるわけですよ。神様の違いで、殺し合うことをしている。宗教のドグマ、宗教の考え方、教義が理性によってつくられたものであって、その違いを「許せない」となって戦争してしまうんですよ。宗教戦争も理性によって支配された人間の悲しい現実です。画一性を追求する、矛盾を排除する、真理は１つと考える。**

**とにかく、我々が本当に会社を発展させよう、自分自身も成長させようと思ったら、違う考え方や違う価値観の人と付き合って、自分にないものを相手から学んで、そして自分の考えを成長させていく。自分の生き方を成長させていく、そういう風にしないと、人間性の豊かな人間にはなりませんよ。人間性の幅ができませんよ。統率力、包容力、器の大きい人間になりませんよ。自分と違うものを排除していたら、最終的に自分しか残らないんですから。人を愛するということは、自分と違う考え方、自分とは違う価値観や自分とは違う宗教を持った人とも仲良くやっていくことができて、相手の宗教も理解することができる。相手の価値観もちゃんと分かってあげることができる。それが人間性の豊かさですからね。相手の宗教は分からないし、相手の立場に立てないし、相手の価値観が反発を感じる、これは人間性が小さい、貧しい、幼いということの証であります。**

**本当に我々が、組織の中で組織人として成長していこうと思ったら、また社会の中で本当に人間性、心豊かな、血の通った温かな心を持って成長していこうと思ったら、我々は考え方の違う人とどうしたら一緒にやっていけるかを考えて、考え方の違う人から何かを学んで、そして自分の考え方を成長させて、そして考え方の違う人に「君と出会えて良かったよ。君と出会えたので君からこれを学ぶことができた。こんなことに気づいてこんなに成長できました。ありがとう、よかった」と、考え方の違う人に感謝ができる。考え方が違うから、だから協力を得られる。お互いにパートナーシップで協力できる。それが個性の時代を生きる方法論なんですよ。そういう力が愛なんですよ。そういう愛の力を磨いていかなければならない。**

**そういう意味で、愛を空間論的に考えていった場合に、愛の本質とは何なのかと言ったら、愛とは他者と共に生きる力だ。愛とは性格が違い、価値観が違い、考え方が違い、宗教が違う人と共に仲良く生きる力のことを愛と言うんだ。考え方の違う人とはうまくやっていけないという人には、血の通った温かな心は存在しない。排除する人間には人間性がない。どうしたら仲良くやっていけるかを考えることによって、血の通った温かな心がつくられていくわけですよ。そういう人間にこれから我々はなっていかなければならない。残念ながら今の我々は、自分と同じ考え方の人しか愛せないのだから、本当の血の通った温かな心はなくなってしまっている、無いと言って過言ではありません。まず空間論的な観点から考えたら、こういう結論になるんだということを知っておいてもらいたいし、このことができなかったら自分は幸せにならない。必ず離婚の危機に直面してしまう。そうならないためには、今お話したことを実践できる自分をつくっていくしかないことを分かってもらいたいと思います。自分の幸せのためにも、このことは受け入れざるを得ない。という風に考えてもらいたいと思います。後は後半にします。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**先ほどは違った考え方とか違った価値観とか、そういう人たちとどうしたら一緒に仲良くやっていけるのかということをお話しました。相手から何かしら自分にないものを学ぶことが大事だということをお話しました。一体、何を学ぶのかということなんですけど、価値観が違うとか考え方が違うとか感じ方が違うというのは、一体どこから出てくるのか。そういうものは全て後天的なものなんですよ。その違いが出てくる原因というのは５つあります。**

**まずは体験が違うと、考え方も違ってきますし、立場も違ってきますし、感じ方も違ってくるし、価値観も違ってくる。考え方の違う人というのは、自分とは体験をしているんです。また経験が違うと、考え方も価値観も違ってくる。経験と体験は英語で言ったらエクスペリエンスで同じなんですけど、日本語で言うと体験と経験は次元が違うんですよ。体験というのは、自分の肉体が外の世界と関わった事実のこと。経験というのは体験から何を学んだか。その体験を自分自身がどのように受け止めたのかという意識の内容が、経験なんですよ。経験と体験はちょっと似ているが大きく違う。赤いきつねと緑のたぬきのようです。**

**３つ目は、学習内容・知識・情報。知識などが違ってくると考え方も違ってくる。４つ目は解釈の違い。同じ事実でもどのように解釈するか。どういう風な観点から見るかによっていろんな物事の解釈が違ってくる。解釈の違いによってまた価値観、考え方も違う。最後の５つ目は、出会い。事件と出会うとか本と出合うなどの出会い。出会いの違いによって考え方も立場も違ってきます。自分が違う考え方の人から何かを学んで、自分の考え方を成長させるということはなんなのかと言ったら、自分にはない体験を相手が持っている場合に、相手の体験というものを自分の中に取り入れたならば、自分の考えはどう変わるだろうか、どう成長するだろうか。そのようにすることで、自分の考えに前とは違った成長が出てくるわけであります。そのことによって、自分の考えが広がっていく。また高度になっていく、また深くなっていくことになったとき、「君と出会えて良かった」「君からこれを学んでこんなこと気づいてこんなに成長できました。ありがとう、会えて良かった」と言えるわけですよ。自分にないものを何かしら相手から発見して、そして自分の中にそれを取り入れて自分の考え方を成長させていく。というのが個性の時代というものを生きていく基本的な生き方であります。それがちゃんとできたならば、離婚の激増は止められる。またいろんな宗教の違い、民族の違いから出てくる戦争も乗り越えていく力を人類は持つことができます。敵から学ぶ、対立する相手から学んで、自分を成長させることができる。成長とは自分の考え方の幅をつくること。また自分の考え方を高度に成長をさせていく。また自分の考え方に深みをつくっていく。学ぶことから起こる愛の力であります。 愛すとは学ぶことだ。相手から学ぼうとしないと愛がないんですよ。相手を知ろうとして、相手から学ぶことは相手に愛があるということなんですよ。いろんな人から学ぼうということは人間への愛である。**

**次は、愛における時間論的本質は何なのか。時間論的な観点から愛の本質を見たら、どういうことが分かってくるか。時間論的とはどういうことなのかと言ったら、どういう時間的な経過をたどって愛は出てくるのか。と考えていくことによって愛の時間的な本質というものが見えてくるわけであります。愛の出発点はどこなのか。それは種族保存の欲求という、全生物が基本的に持っている本能的な欲求であるにあります。種族保存の要求から直接的に出てくるのは恋。生殖活動をして、子孫を残すために出てくるのは恋なんですよ。恋の究極の目標は生殖活動させて子孫を残すところに恋の目標がある。愛というのは必ずしも生殖活動を目的とはしない。愛の中には男女の愛もあり、夫婦、親子、兄弟、師弟の愛もある。また仕事や国家に対しても愛はある。恋よりも精神的に純化された世界だ。愛とは、流れとしては種族保存の欲求に根ざしているが、恋が純化されて愛になる。**

**そう考えていったら、愛の本質とは何なのかと言うと、本当にちゃんとちゃんとの味の素で分かろうと思ったら、恋と愛との違いを考えていかないといけません。恋と愛との違いをちゃんと理解することによって、愛の時間論的な本質が分かってくるという流れになるわけです。これも哲学的に物事を考えてロジック・論理の流れです。愛というのは種族保存の欲求に根がある。だけども、種族保存の欲求から直接的に出てくるものは恋だ。恋は生殖活動を目的とする。けれど愛は、必ずしも生殖活動を目的とはしない。愛には生殖活動以外の国を愛する、仕事を愛する、そういうことも含まれてくるので、愛は恋よりもより精神的に純化された高度な世界だ。**

**現実的には、恋愛と言ってしまっていて、愛と恋をごちゃごちゃにしてしまっている。だから本当の愛というものをなかなかつかみにくい。そこで愛と恋とは次元が違うところから出発して、一体恋とは、愛とはなんなのかということを見極めていく作業をしないといけません。恋とは、先ほど申し上げたように生殖活動をして子孫を残すことを最終的な目標として出てくるものが恋という心情なんですよ。恋というのは離れていないと恋しいという心情は出てきませんので、離れているということがまずは基本。そして相手を好きになるという状態に導かれていく。思春期になってくると、誰でもお互いに異性との関係で引き合うことになってきて、いろいろな人間関係から、「あの人は嫌い」「あの人は好き」ということになっていって、だんだんだんだん好きになっていって恋になっていく。好きになっていって、恋しい心情が出てくると、だんだんだんだん相手を理想化する。すると、あばたもえくぼに見えてきてしまう。相手の欠点すら良く見える。さらに高まると、恋は盲目となってしまって、本当の相手の姿が見えないということになって、自分の心の中で相手を理想化してしまって、自分の心の中のイメージを通して相手を見るということになってくる。相手の現実はどうであれ、相手はものすごくかっこいい、素晴らしい人に見えてしまう。それが恋は盲目という状態なんですよ。**

**なぜ恋は盲目となって本当の相手の姿は見えないようになってしまうのか。相手の本当の姿がちゃんと見えていると、誰も結婚したいと思わないんですよ。どうしても結婚させないと、子孫は残せませんから。だから、どうしても相手の本当の姿は見えなくさせてしまわないといけないという必然性が命にあるわけです。本当の相手の姿が見えなくなってしまって、「もうこの人しかいない」「一生この人と一緒にいたい」と思って結婚を決意する。結婚すると、ひとつ屋根の下で生活するものですから、離れていませんからね、だから生活し始めると離れていませんから、離れていなければ生じない恋しい心情だんだんしぼんでくる。恋しいを心情がしぼんでくると、相手を理想化する心情もしぼんでくる。日を追うごとに相手の短所、欠点が目についてくる。すると、「なぜこんなのと一緒になってしまったんだろう」と思って反省してしまう。そういうことが進んでいくと、あばたがあばたに見え、えくぼはえくぼに見えると、正気にかえってしまう。この正気にかえったところから愛は始まるんです。結論から言うと、結婚は人生の墓場ではない。結婚は恋の墓場。愛の始まりという構造になっているんですよ。**

**結婚は恋の終わりで愛の始まり。人間を愛するようにするということは、不完全な存在を愛することであって、恋をするときのように完全無欠のロックンローラーを愛するようなものではない。恋のときは、相手を理想化してしまって「こんなかっこいい人はいない」と思い、完全無欠のロックンローラーに相手をしてしまって、本当にも好きで好きでたまらんという状態になってしまって、結婚するんですけど。本当に人間を愛するということは、不完全な存在を愛することなんだ。不完全とはどういうことなのかと言ったら、人間はどんな人間でも長所半分短所半分。どんな人間でも他人から嫌われ、非難され、他人から軽蔑されるところを半分は持っている。それが偽らざる人間の現実だ。どんな人間にも長所も半分あるけど、短所も半分ある。人間を愛するということは、不完全な存在を愛することなんだ。その人を愛するということは、その人の長所も短所も丸抱え。長所は愛せても短所を愛せないという人間は、人を人間として愛する資格がない。その人を愛するということは、その人の長所も短所も丸抱えなんだ。それが人を愛する真実の意味。長所しか愛せない人間は、人間を人間として愛する資格はないんだ。人間への愛というのは、長所も短所も丸抱えなんだ。長所を愛せても短所を愛せない人は、神様しか愛せない。**

**実際問題、長所は愛せても短所なんか愛せないと思ってしまうんですよ。確かに愛を自然のままで放っておいたら長所は愛せても短所は愛せないですよ。ここに愛を文化として成長させていくという努力の価値が出てくる。どうしたら一体、長所も短所も愛せるのか。そこには努力をしないとできない力というのがあるわけです。長所も短所も愛することができる力、これを愛の文化と言うんですよ。なぜ短所も愛さないといけないのか。とにかくは、短所がなければ、人間らしい謙虚な心はできない。人間の本質は心と言われますが、人間らしい心とは謙虚な心。謙虚な心をつくってくれるのは長所ではない短所なんだ。短所がなかったら人間らしい謙虚な心はできないし、血の通った温かな心はできない。短所こそ人間の本質なんだ。短所がなかった人間ではないんだ。だから、相手を人間として認めて、人間として相手を愛そうと思ったら短所を愛する力をつくる以外にない。どうしたら短所を愛せるのか。それを考えることが、愛を能力として成長させる。愛の実力というものを高めていく決め手になる努力の目標であります。**

**どうしたら短所を愛せるのか。その力をつくっていこうと思ったら、まずは短所がなかったら人間ではないということをちゃんと認めなければならない。残念ながら今日までは、理性的に人間というものを見ていたものですから、理性は人間に完全性を要求していました。ついつい理性的に人間を見ると、長所はいいけど短所はいけないということになってきて、短所をなくしましょうという教育がされてきたわけですよ。だから我々は人の短所を見ると非難するし、なんとかそれはなくならないだろうかと考えてしまう。これは間違った人間観に基づく教育の結果、そういう気持ちにさせられてしまっているんですよ。だけども、短所がなくなったら人間ではないんだから、人間には短所がなければならないんですよ。短所はあっていいんですよ。短所をなくす努力はしてはいけない。短所をなくす努力したら人間でなくなってしまって、人でなしになってしまう。短所があってこそ人間なんだ。まずは短所をなくさせる努力はしたらいけないし、自分自身も短所をなくす努力を絶対してはいけない。短所をなくす努力をするぐらいであったら、長所をとことん伸ばす時間に使わなければならない。短所はなくならないんですよ。もちろん長所もなくならないんだけども、短所はなくならないんだ。長所は伸びるわけですから、長所を伸ばさないと短所はなくならないのだから、無駄な努力になってしまう。絶対に間違った努力はしてはいけない。長所を伸ばすことに全力を注がなければならない。**

**だけど、短所はなくならないからといって、開き直ってしまったらこれは動物だ。動物というのは、人間も動物ですけど、自分に短所があっても短所を知らない。人間は自分の短所はどこなのかを知ることができるところに人間の価値がある。人間になろうと思ったら、まずは「自分の短所はここで、自分の長所ここです」と言えないと、人間にはならない。短所を知らないと人間らしい謙虚な心はできないんですよ。言えて初めて人間性という人間の価値が生まれてくる。短所があっても短所を知らなかったら動植物。まず人間になろうと思ったら、人間らしい謙虚な心をつくるために自分の短所をちゃんと知る努力をセントバーナード。短所を知ることによって人間らしい謙虚な心ができてくるわけです。短所を知っただけでは、人間性において半分しかできていない。さらに長所も知って、そして長所を伸ばす努力をする。そのことによって人の役に立つという社会性が出きてくるわけです。人の役に立つ人間になる。人のために何かをしてあげる。そういう力が長所を伸ばすこと出てくるわけです。長所は人の役に立つところまで伸ばしていかないと、長所の意味がないわけですよ。**

**プロというのは、「さすがプロですね」と言われる能力をつくらないと、プロとして金を取るということはできないわけですよ。さすがと言われないような半端な力で金を取ろうなんていうことはおこがましい話だ。プロである限りは、金を取るからには、金を惜しみなく出したくなる力を示さないと、プロの示しがつかない、堂々とは金が取れない。恥ずかしくて金は取れないということを肝に銘じないとプロ根性はできません。客をうならせる、さすがと言わせる自分を早くつくらないと、恥ずかしくて堂々と金は取れない。そのために我々は長所を磨く努力をセントバーナード。長所を伸ばしただけでは、人間ではない。自分の短所が何なのかを知って、そして短所の自覚によって人間らしい謙虚な心をつくる。自分にはこんなダメなところがあるということで傲慢にはなれない。そういう人間性が出てくることで、感じのいい人と言われるような自分になれるわけであります。**

**人間において傲慢さほど醜いものはない。傲慢になったとき人間は人間であることを根底から失格するんだ。傲慢な人間ほど嫌な人間はいない。醜い人間はいない。それは人間であることを根底から失格しているから。長所というのは神と共有するけれども、人間の本質は短所なんだ。短所があってこそ人間だ。短所が何なのかを知っていることが人間の印。だから我々は、人間になるためにまずは自分の短所がどこなのかということを知る努力をしなければならない。そして同時に、自分の長所はどこなのかということを知る努力をしなければならない。そして短所はなく努力はしないで、自分にはどういう短所があるのかということを常に自分に言い聞かせなければならない。ちゃんと自分で分かっているという自分にしなければならない。**

**だけど、短所が出てくると嫌われてしまう。だから短所はなくしたらいけないけれど、短所はあまり出てこないように注意をさせなければならない。それは教育であり、出てこないように注意をしなければならない。なくす努力をしたらその人の個性がなくなってしまう。短所があってこそ個性なんだ。長所も短所も個性なんだ。短所をなくすというと個性をなくすことなんだ。自分の短所はどこなのかを知っていることが自分の個性。短所が出てきたら嫌われますから、だから短所あまり出てこないように注意をしなければならに。常に言い聞かせなければならない。それも愛なんだ。短所をなくす努力をさせないのも、短所が出てこないようにするのも、愛。**

**さらには人の短所を発見したら責めてはいけない。短所はなくならないんだから、人の短所を責めるということは、その人を殺すことだ。その人を苦しめることになる。短所を発見したら助けてあげたい、助けてあげよう、助けてあげないといけない、と思うのが、愛なんだ。何かしらそのことで自分がその人役に立ってあげたい、助けてあげたい、それが血の通った温かな心なんだ。短所を責めるところには、血の通った温かな心は存在しない。人の短所を発見したら、黙って助けてあげる。そこに血の通った温かな心、愛があるわけです。どんな人にも長所短所があるんだから、人の短所を助けてあげるために自分は長所を磨くんだ。そのために自分の長所はあるんだ。社会というのは役に立ち会うという関係性です。だから、自分が人の役に立とうと思ったら、長所がなかったら自分は人の役に立てませんからね。そのために人は短所を持ってくれているんだ。人に短所があるから自分は役に立つことができるんだ。役に立つためには人を助けてあげるだけの力を磨いておかないといけない。ということで、長所を伸ばすという努力が愛ゆえになされるわけであります。**

**長所を磨くのも愛の努力。それは自分の為ではなくて人の役に立つためだ。実際社会というのは、人の役に立たないと金が入ってこないんですよ。愛の努力をしないと金が入ってこないんですよ。自分の能力を磨くのは、人を助けてあげるため。人の役に立つためだ。さらには短所は隠しておいたらいけないので、短所があるということはもう分かっているんだから、短所をさらけ出して、自分のダメなところはここなんだと、わざとさらけ出して、そして皆に助けを仰いで、助けてもらったら「ありがとう、君はすごい力を持っている」と、相手を尊敬して感謝して恩を感じる。そのことによって、我々は人間として美しい、感謝できる心、恩を感じる心、相手を褒め称える心をつくることができるんですよ。短所をさらけ出せない人間は、美しい心を持つことができない。短所をさらけ出して助けてもらう勇気が、人間に美しい心をつくってくれるんです。**

**短所は隠さなくてもいい。さらけ出す勇気を持って、そして助けてもらう力をつくっていく。助けてもらうことこそ、人間として美しい行為で立派なことなんだ。人を助けてあげるだけでは、相手を惨めにする。人を助けてあげる力を持っているだけでは傲慢になる。助けてもらってこそ人間。助けてもらえてこそ人間。助けてあげたくなってしまうような可愛い人にならないといけない。助けてもらう力も人間として素晴らしい能力なんですよ。助けてあげることと助けてもらうことは同等の価値がある、素晴らしい人間的行為。助けてあげるだけでは人を惨めにするし、また傲慢になる。助けてもらうことによって謙虚な心ができて、助けてもらうことによって本当に感謝ができる。感謝、感謝とよく壁に張ってありますが、助けてもらって初めて心から感謝ができる。助けてもらって初めて相手を尊敬できる。それが実質のある、実態のある感謝であり、実態のある尊敬だ。だから助けてもらえないと、美しい人間的な心はできない。もっともっと助けてもらう生き方を覚えないといけない。助けてあげるだけでは、あまりにも人生は辛い。なんでもかんでも自分でしようと思ったら、これは不完全な人間には無理です。半分は助けてもらうということが人間として大事な生き方なんですよ。**

**会社というのはお互いに助け合う構造で結ばれているんですから、もっともっと助けてもらえるような人間性というものをつくっていかないといけない。助けてもらうだけでは人を利用するだけですから、何か一つは人をちゃんと助けてあげることができる力を磨いていかないといけない。助けてもらうだけで馬鹿にされる。馬鹿にされないためには何か一つぐらいは他人から一目置かれる、「あいつは他のことはダメだけど、このことについてすごいな」と言ってもらえる、他人から一目置かれる存在感のある能力を一日も早くつくるということに努力しなければならない。そのために自分の長所を知って、一日も早く他人から一目置かれる存在になる能力にしていくことを考えなければならない。「さすが」と言われるものを早くつくる。それがやっぱり人生を楽しく愉快に生きていくための重要な原理です。だけど、素晴らしい長所を持っているだけでは人間ではない。助けてもらえる力をつくる。助けてもらう謙虚の心をつくる。助けてもらう勇気を持つ。これも人間的に素晴らしい生き方なんだ。とにかく助けてあげることも立派だけど、助けてもらうことを立派なことなんだ。助けてあげることと助けてもらうことは同等の価値がある素晴らしい行為。人間には両面がなければならないんだ。そのために我々はわざと意識的に短所をさらけ出して、そして助けてもらえるという自分をつくっていかなければならない。それも努力しないとできない力です。**

**短所をさらけ出して、そして人に助けてもらう力を活人力と言います。人を輝かせる力。人を活かす力です。自分の短所をさらけ出すから相手の存在が輝くんですよ。自分の短所さらけ出さなければ、人間関係は競争になって勝ち負けになってしまう。自分の短所をさらけ出すから相手の良いところが引き出されてきて、そして相手を褒め称えるという関係性ができてくるわけであります。ずっと短所は見せてはいけない、隠さないといけないと言われてきたものですから、ほとんどの人が短所をさらけ出す勇気を持てない。だけど、やはり組織というものはたくさんの部下を抱えて仕事をしなければならない。さらに部下を成長させようと思ったら、部下に仕事を与えて仕事をしてもらわないといけない。部下に助けてもらわないと、部下を育てられない。自分で何もかもやってしまったら、自分が苦しくなって、30代の鬱と言われる状態になってしまう。もっともっと部下にほとんどの仕事をしてもらって、そして部下を育てるということによって自分の役職・立場というものを全うしていく。そういう生き方を覚えないと、地位が上がるに従って自分が辛くなりますよ。地位が上がるに従って部下にどんどん仕事をさせて、部下の力を成長させてあげるために自分の仕事をどんどん分け与えて、そして自分は楽をして部下を成長させるという立場に移行していかないといけない。経営者も社長さんもとにかくは上司と言われる方々は、どんどん短所をさらけ出して、部下に助けてもらわないといけない。「本当に君を雇って良かったよ」と部下を褒め称える。そのようにして、部下はやる気を出して成長していくわけではあります。上司がもっともっと短所をさらけ出さなければ、部下は育たない。人を育てる力をぜひ組織というのは持ってもらいたいと思うんです。そのためには短所をさらけ出す。他の人に助けてもらえる組織をつくっていくことが、これからの人間的な組織には大事であります。それが心の繋がりをつくる仕事の仕方なんですよ。部下に助けてもらって、「君はすごい、ありがとう。君を雇って良かった」というのが、心の繋がりができる組織になるんですよ。**

**これまでの組織は、仕事の繋がりと役職の繋がりで結びついて仕事をしていたんですよ。それでは互いに理性的な責め合う組織になってしまいやすいです。本当にこれから血の通った温かな人間的な組織をつくっていこうと思ったら、組織の根底には心の繋がりがなければならない。心の繋がりを土台に据えて、その上に仕事の繋がりをつくり、その上に役職の繋がりをつくっていく。これがこれからの人間を大事にする企業組織の在り方であります。心の繋がりをつくるということの根本原理は、誰でも長所短所半分ずつあるんだから、長所短所をどのように組み合わせていくか。誰と誰を一緒に仕事をさせたらもっとも気分良く働けるか。一緒に仕事したら最も能率が上がるか。最高の組み合わせを考えていく、ここにパートナーシップということの本当の意味があります。**

**パートナーシップというのは、一緒に仕事をしていたらパートナーシップというのではなくて、どの長所と短所を組み合わせるか。そして助け合いという構造をつくってあげられるか。それが人間的組織をつくっていく基本原理であります。感性論哲学の立場からするならば、本当に人間的組織をつくろうと思ったら、まずは毎年毎年４月に新入社員が入ってきたら、そのときをチャンスとして全員社員が紙を半分に仕切って、右の方に３つ長所を書いて、左の方に３つ短所を書いて、長所も短所も配る。お互いにその人の長所と短所を認識してもらう。自分の長所と書いたところには「使って下さい」と書いて、短所のところには「助けてください」と書く。お互いに助けてもらいたいところ、使ってもらいたいところを知り合って、責め合わないで助け合って仕事をしていく。そういう構造をつくっていく。これが、全ての人に長所短所があるということをちゃんとわきまえた人間的組織のつくり方の基本であります。**

**どんな人と付き合う場合でも、人間というのは必ず自分にとって嫌だと思うところが半分は持っているんだ、なくならないんだ。それはしょうがないんだ。そのことをちゃんとわきまえて、どんな人とも付き合わなければならない。どんなに好き好き好きで結婚しても、長く付き合ったら必ず自分が嫌だというもところが半分は出てきてしまうんです。これ避け難い宿命なんだ。どんなダメな人でも必ずいいところが半分はあるんですよ。相手のいいところが見えないということは、相手の責任ではない。半分もある良いところが見えてこないというのは、自分の人間性の貧しさ、自分の人間性の狭さ、自分の人間性の未熟さが原因です。相手のいいところが見えてくる自分に成長することが大事なんですよ。世間でどんなに尊敬されている人でも、その奥さんに聞いたら「あんな人、なぜそんなに尊敬されているの!? 」ということになってしまって、奥さんからしたら普通の人になってしまうんですよ。誰でもそういうことなので、長く付き合ったらどんなに立派な人、どんな素敵な人でも、長く付き合ったら必ず自分にとって嫌だと思うところが半分は出てくる。これは避け難い。その覚悟を持って人間とは付き合わなければならない。そうでないと、一人の人と仲良く付き合っていくという人間関係を築けません。**

**なぜ人間性というのは、長所短所が半分ずつあるのか。その根拠もちゃんと知っておいてもらいたいんですよ。その根拠は、人間も宇宙の中に存在する１つの命である。人間も大宇宙の一部を占める存在なんだ。よく人間は小宇宙だと言われますが、人間も大宇宙の一部分なんです。つまり、我々も大宇宙なんだ。では、宇宙とは一体なんなのか。マイナスに評価されるエネルギーとプラスに評価されるエネルギーが、エネルギーバランスを模索しながら宇宙の秩序をつくっている、これが宇宙の摂理と言われる宇宙の構造なんです。マイナスとプラスがお互いに協力をし合いながら、あらゆるものはつくられていきました。宇宙に存在する在り方の基本は、バランス作用・平衡作用・調和作用と言って、そういう働きが宇宙の中にあります。バランスを取ろうと思ったら、お互いに相対立する原理がないと、成り立たない。だから、宇宙にあるものはすべて対存在と言えます。一対という構造で成り立っているんです。プラスにはマイナスがあるし、陰には陽があるし、光には影があるし、善に悪があるし、美には醜、真には偽、清には濁、男には女、動物には植物、表には裏、全て対になっているんですよ。片方がなくなれば、片方もなくなってしまう。対という構造で、しかも両方がお互いに協力し合って、全体の秩序を維持するという構造で成り立っています。だから、人間の肉体の構造も左右シンメトリーに近い構造になっています。ちゃんとシンメトリーになってないというのは、宇宙にはバランスを取るという働きでいろんなものつくるものですから、ちゃんとバランスの取れた状態で止まらないんですよ。どんな人の肉体もちょっとずれている、ちょっとアンバランスなんですよ。だから顔を写真に撮って、ネガを半分に割る。左半分、右半分だけで顔をつくると別人になってしまうんです。シンメトリーに近いように見えるんだけど、実は相当ズレがあるんですよ。バランスを取る働きであらゆるものがつくられているという証明なんですよ。**

**あらゆるものがつくられてくるものですから、だから人間性というのも、長所と短所があることは半分ずつあるんだという風に言わなきゃならないし、考えなければならないということです。必ず長所短所は半分ずつあるんだというものなんですよ。あらゆるものが宇宙の摂理によって支配されているということを我々は忘れてはならない。宇宙の摂理の力があらゆるものを支配しているということの実体的な証明は何なのかと言ったら、何も考えないで気持ちがいいとセックスしていても、ちゃんと男の子と女の子は半分ずつになっているんですよ。男女どちらかが多くなってしまった時代もなく、男女のバランス良く半分ずつ。これが宇宙の摂理の支配の力。これを哲学では、予定調和と言います。予定調和とは、我々が何も考えなくてもちゃんと宇宙があるものを調和に導いている。これが、宇宙の摂理の力が人間の世界を支配しているという意味であります。実際、我々も生きているのは自分の力ではない。寝ていても死なないというのは、宇宙の摂理の力によって支えられて生かされているからなんです。我々の体には常に宇宙の摂理の力が働いている。栄養摂取も空腹満腹というバランスを取っている。神経系でも交感神経、副交感神経とバランスを取っている。バランスを取ろうと思ったら、相異なる原理があって、それが協力しながらバランスを取るということになっています。あらゆるものが動きながら健康を保つ。それは自然治癒力と言います。血糖値でも上限と下限があって、この範囲なら健康という幅があって、幅で揺れ動きながら健康を保っているという形になっております。これは全部宇宙の支配の力なんですよ。だから我々の人間性においても、必ず長所短所が約半分ずつ。自分の人間としての生き方をつくってくれているわけです。だから我々は宇宙の摂理の要請に従って、長所も短所も活かして使うという生き方を覚えなければならない。長所だけが大事なんではない、短所も大事なんだ。**

**理性で考えたら長所はいいけど、短所はいけないことになってしまう。理性で考えると悪はだめで、善はいいことになるんですよ。現実は常に善が半分、悪が半分なんですよ。悪はなくならないんですよ。昔から石川五右衛門先生がおっしゃっていることですが、「浜の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」。海岸の砂浜の砂が全部なくなったとしても、泥棒はなくならないんだと言っています。それほどに泥棒はなくならない。それほどに悪人はなくならない。常に善と悪は半分ずつだ。自分がどんなに良いことをしても、良いことをするとは必ず半分の人間には迷惑になっているんですよ。完全な善もないし完全な悪もないんですよ。例えば、前の総理の小泉さんがどんなに素晴らしい改革をしても、改革というものは良かれと思ってするんですけども、その改革によって得をする人が半分また不利益を被る人も半分出てくるんですよ。これは避け難い。だから大政治家というのは、良かれと思ってやったことによって不利益を被る人間たちの配慮を忘れない。そこに血の通った温かな心のある政治が成り立つんです。我々もどんなに良いことをしても、それによって迷惑を被っている人がいる。それによって不利益を被った人がいる、ということを忘れてはいけません。自分のやったことに対して反感を持っている人間がいることを常に忘れてはいけません。しかも自分でやったことに反感を持っている人間が常に半分をいる。社内の半分は自分のやったことに対して批判的なんだ。だから自分でやったことにおいて迷惑を被り、またそれに対して良く思っていない人たちへの配慮をして、それに対するちゃんと心遣いをするということが人間らしい心を持った生き方ということになってくるわけです。良いことしたのだから良い、そして自分は善人というのは浅はかだということなんですよ。必ず自分は半分の人間に迷惑になっているんだ。そのことを分かっていないと、人間社会を深く生きる心温かな生き方は出てこないんですよ。**

**理性で考えたら善はいいけど、悪はいけない。悪いことはしたらいけないというんですけど、しかし、悪いことをする人間はなくならないんですよ。それは、なぜか。悪と犯罪、よく似たようなものですけど、とにかく犯罪とか事故がなくなったら社会は停滞して発展しない。犯罪も事故も社会を発展させるために出てくる。問題がなかったら会社は発展しない。自分の人生に問題と悩みがなかったならば人間は成長しない。問題も悩みもなかったらいいようなものなんだけど、なかったら人間は成長しないんだ。問題もない、悩みもないようでは、のほほんとしてしまって、成長できない。「今のままでいい」となってしまいますからね。会社にもクレームがあり、またいろんな人間関係上の問題も出てきて、仕事上もいろいろと不都合なことが出てくる。**

**だから、どうしたらいいかを考えてますます良い会社になっていく。問題と悩みがなかったならば、あらゆるものが発展しない。犯罪すら事故すら社会を発展させるために出てきてくれているんだ。そのように50%はそういうことを考えておかなければならないんだ。だから、本当に血の通った温かな心を持って我々が生きるならば、犯罪者にすら感謝しなければならない。犯罪者というのは、社会にどういう問題があるのかということを教えてくれているんだ。もちろん悪いことはしてはいけないですが、不完全な人間はどうしても他人に対して迷惑をかけたり、悪いことをせざるを得ないような状況に追い詰められてしまって、心ならずも罪を犯すことがあるんですよ。皆、悪いことをしたくてするのではないし、嘘を言いたくて言うのではないし、騙したくしているのではないし、裏切りたくてしているのではないんだけど、そういう状況に追い詰められてしまって、心ならずも犯してしまう。それが人間の悲しいところであって、であるが故に裏切った人間、嘘を言うような人間に対して、どれだけそれは辛かったろうか、どんなに悩んだだろうか、それを分かってあげなかったら、本当に血の通った温かな心を持った人間とは言えない。罪を責めて相手に償いを求めるだけでは理性だ。誰も嘘を言いたくて言うんではないし、裏切りたくて裏切るんではない。そういう善良な心情というものをどんな人も持っているんだ。しかも、皆、おぎゃーと生まれたときには、清らかな心と瞳を持って生まれてきた。そういう人たちが、やがて成長過程でいろんなことがあって、罪を犯さなければならないような状況に陥ってしまうのは、決してその人だけの責任ではない。周りの人間たちの接し方によって、罪を犯さなければならないことになってしまうということもあるわけなんですよ。**

**だから、罪を犯さざるを得ない状況になってしまった人間の悲しさ、辛さ、苦しさを分かってあげられて、初めて血の通った温かな心があるということになってくるわけですよ。そういうことを日本では、大岡裁きと言って、「罪を憎んで人を憎まず」と言います。どんな人も悪いことをしようと思ってするのではない。いろんなことがあって、そうせざるを得ないような状況に追い詰められてしまって、心ならずも、悲しいかな罪を犯すことになってしまうんだ。そういうところをよく考えて罪を裁かなければならない。そこに温情のある裁きが出てきます。そういう心温かな、本当に人間へ愛を持ってお互いに関わろうと思ったならば、人のダメなところを責めてはいけない。助けてあげようという血の通った温かな心を持って人に関わる、という心情を努力してつくっていかないといけません。ついつい嫌なところ、ダメなところを責めてしまいやすいんですけど、それは理性。理性は人間に完全性を要求する。ダメなところをなくそうとする。それは人間ではない。血の通った温かな心がないことの証明だ。もっともっと我々は、温かな心を持って人と関わるという心の繋がりをつくるということを基本に忘れてはなりません。違う言葉で言ったら共感同苦・共感同非といって、他人の苦しみを我が苦しみとして感じる。他人の悲しみを我が悲しみとして感じる。それが血の通った温かな心の具体的な在り方であります。もちろん罪を犯せば償わなければならない。責められなければならない。だけども、それは50%で、あとの50%は罪すら感謝される価値がある。罪を犯した人間は、そのことによって現実の社会の問題を明るみに出したんだ。「こんなところに大きな問題がある」ということを皆に教えてくれているんだ。だから、罪を犯した人間に50%は、その人の罪によって暴き出された現実の問題というものをちゃんと受け止めてあげて、「君の罪を我々は決して無駄にはしません。必ず君の犯罪を活かしきって、もっと素晴らしい社会をつくって見せます」と言って、罪人にすら感謝をする。そういう心の持ち方というものもこれからの社会には要求されてくるわけであります。責めなければならないことが半分あるけど、だけどもその罪にすら感謝しなければならないことが半分はある。どんなものにもプラス面、マイナス面があるんだ。両方ちゃんと分かって、初めて人間としての価値があり、そこに血の通った温かな心がつくられていく原理がある。**

**そう考えていくと、どんな問題でも、問題というものは自分を成長させてくれるために出てくる。そういう解釈をしなければならない。問題というのは、自分に仕事を与えてくれているんだ。問題というのは、乗り越えていく人がいないかを探し求めているから、出てくるんだ。問題を通して自分の仕事、自分の使命を掴む。そういうことも考えないといけません。基本的に問題とか悩みとかというのは、実は母なる宇宙が個なる命である人間に与える愛の試練なんですよ。問題も愛なんですよ。苦しみも愛なんですよ。**

**なぜ、そう言えるのか。宇宙が命をつくったから、地球上にあるものは全て個なる命を言えますが、母なる宇宙は自分の産んだ個なる命を成長させるために環境の激変という問題を与える。環境の激変はうっかりしたら、全生物は絶滅するかも知れないほどの大きな問題です。しかし、それすらも母が子に与える愛の試練と言えるのです。なぜならば、環境の激変がなかったら、命は進化していないからです。環境が激変しないと、ガラパゴス諸島に住んでいる生物たちは生きた化石と言われて、大昔の命の形を持ったまま、全然命に進化ということが起こらなかった。成長しなかった。そういうことを考えても、環境の激変する母なる宇宙が個なる命に与える愛の試練。愛ゆえの行為だと言わなければならない。問題すら自分に成長の道しるべを教えてくれる愛の行為なんだ。**

**この会社に入ったから、こういう問題にぶつかることができた。千載一遇のチャンスと言えるものなんだ。この会社に来なかったら、こういう問題にぶつかれなかったかも知れない。ピンチはチャンスだと言われますが、ピンチが本当に自分の潜在能力を引き出してくれて、自分を本当に成長させてくれるという働きをするんだ。どういう問題もすべて自分を成長させるために出てきてくれたという意味がある。どんなものにもプラス面とマイナス面があって、対存在というんですけど、両面の解釈というものを常に我々は忘れてはならない。常に両面から物事を見つめて解釈していく。そこに人間への愛、存在への愛、現象への愛という力が出てくることになるわけです。どんなことに対しても良い面と悪い面があり、一方的に責められるということはないんだ。常に50%はそれを肯定して、そこから学ぶということがある。世界への愛と言ったり、存在への愛と言ったりしますが、愛の意識も現実の社会を本当に人間らしく生きていこうと思ったら、我々は忘れてはならない大事なことだと。**

**血の通った温かな心とは一体何なのか、ということをちゃんと分かってもらいたい。そのことによってしか、血の通った温かな組織という人間的な組織をつくれません。そういうことを考えていくと、時間論的な観点から愛とは何なのかを考えていくと、愛というのは短所許し補い、長所と関わる力である。愛と言っているものが、実はどういうものかと言うと、短所を許す力が愛。許せるという力が愛。短所を補い、許す力。責めるのは理性で愛ではない。人の短所を補ってあげようという気持ちが愛。長所と関わる力、長所を発見し、長所を褒め称え、伸ばしてあげるところに愛の働きがある。人間が本当に人間らしい生き方をしていこうと思ったら、短所が許せるということが一番大事なことなんだ。だから、よく愛するということは許すことと言います。最も根底に置かなければならないことは、許すことができるという愛である。人間は不完全ですから、だからちょっとした問題点を責め合ったら、人生は地獄だ。組織は地獄だ。苦しくなる。不完全な人間においては責め合ったら地獄だ。だから、お互いに助け合って生きていく。そういう心温かな関わりをつくっていかなければならない。そのために我々は短所はなくならないということをちゃんと知らなければならない。自分の短所を知ることによって人間らしい謙虚の心ができるということを知っていなければならないし、また短所を責めるのではなくて、短所を助けてあげなければならないことを知っていなければならない。そして、短所が出てこないように注意をするということも相手への思いやりです。自分の短所は出てこないように、相手にも短所が出こないように注意する。自分の短所をさらけ出す勇気を持って、そして助けてもらった相手に感謝をするという美しい生き方というものを覚えていかなければならない。その基本が愛するとは許すこと。愛の極めつけの言葉になるわけです。**

**我々が、愛の実力を能力として磨いていこうと思ったら、どういう努力をセントバーナードかと言ったら、我々は短所を認める力、短所を許す力を磨いていかなければならない。また、補い合う力を磨いていかなければならない。長所を発見する努力をする。長所を発見する能力も磨いていかなければならない。「こんなやつに長所なんかあるか」というのは、自分の人間性の狭さ、未熟さ、貧しさ。どんな人にでも長所は半分もあるんだ。それが見えないということは、自分に問題があると考えて、自分の成長の糧にしなければならない。短所を見つけ出す能力をつくって、短所を褒め称える能力をつくっていく。長所を発見する能力、褒め称える能力をつくる。それは、全部、愛だ。時間的な観点から、愛の本質とは何かと言えば、愛とは短所を許し、長所と関わる力である。**

**ということで、空間論的な愛の本質と時間論的な愛の本質をガッチャマンすると申しましょうか、合体させて統合して、人間において愛の本質とは何なのか。愛とは、他者とともに生きる力であり、短所を許し補い、長所と関わる力である。このように愛の本質を見極めることができます。そして我々は、愛を現実を生き抜く力として自分のものにしようと思ったならば、我々はどうするかと言ったら、他者と共に生きる力を磨いていかなければならない。性格の違う人とともに生きる、考え方や感じ方の違う人と共に生きる、その力を磨いていかないと、素晴らしい人生を送ることができないんだ。愛の力を成長させそうと思ったら、他者と共に生きる力を磨いていかなければならない。そして短所を許す力を磨いていかなければならない。短所を補う力を磨いていかなければならない。そして長所を発見する力を磨き、褒め称える力を磨き、長所を伸ばしてあげる力を磨いていく。これが愛の努力だ。**

**愛の実践的原理は努力なんですよ。現実的には愛があるかどうかは努力できるかどうかによって決まるんです。自分が相手をどの程度愛しているかということは、自分が相手のためにどの程度の自己犠牲的努力を払えるかによって、自分がその人をどれだけ好きなのか分かるわけですよ。また相手が自分のことをどの程度愛してくれているかは、相手がどの程度自分のことについて自己犠牲的な努力を払ってくれるかによって、その人の自分への愛の深さが分かるわけです。愛の実践的原理は、努力。相手のために努力する気持ちがなくなったら、愛は失せた。相手のために努力する気持ちがある限り、愛は残っているんだ。だから、努力をして愛の能力を成長させていくことが、これからの生き方として大事な課題です。愛は自然発生的な状況のままで放置してはいけない。愛は努力してつくっていく文化なんだ。我々は理性によってつくり出される離婚の激増、幼児虐待、戦争という問題を愛の力によって解決し、乗り越えていく。そういう力を持った人間に我々は成長できる。自分が人生において離婚の危機に立った場合、それを乗り越えていくためにも、また子どもを幸せにしてあげるためにも、愛の実力を磨いていく努力を常に心がけなければない。是非今日の話を参考にして、アサヒグローバルという組織の中で、さまざまに出てくる問題を自分の成長の糧として、どのように心の繋がりをつくり、愛の力を磨いていったら良いのかということを考えてみてもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**